

三国志

篇外余録

吉川英治

青空文庫

諸葛菜しよかつさい

一

三国鼎立ていりつの大勢は、ときの治乱が起した大陸分権の自然な風雲作用でもあったが、その創意はもともと諸葛孔明しよかつこうめいという一人物の胸底から生れ出たものであることは何としても否いなみがない。まだ二十七歳でしかなかった青年孔明が、農耕の余閑、草廬そうろに抱いていた理想の実現であつたのである。時に、三顧こして迎えた劉り玄徳ゆげんとくの獎意しょういにこたえ、いよいよ廬ろを出て起たと誓うに際

して、

「これを以てあなたの大方針となすべきでしょう。これ以外に漢朝復興の旗幟きしを以て中原ちゅうげんに臨む道はありますまい」

と、説いたものが実にその発足ほつそくであつたわけだ。

そして遂に、その理想は実現を見、玄德は西蜀せいしよくに位置し、北魁ほくきの曹操そうそう、東呉とうごの孫権そんけんと、いわゆる三分鼎立ぶんていりつの一時代を画するに至つたが、もとよりこれが孔明の究極の目的ではない。

孔明の天下の三分の案は、玄德が初めからの志望としてしている漢朝統一への必然な過程として選ばれた道であつた。

しかし、この中道において、玄德は世を去り幼帝みなしごの将来とともに、その遺業をも挙げて、

——すべてをたのむ。

と、孔明に託して逝いつたのである。孔明の生涯とその忠誠の道は、まさにこの日から彼の真面目しんめいもくに入ったものといつていい。遺孤みなしごの寄託、大業の達成。——寝ても醒めても「先帝の遺いしよ詔う」にこたえんとする権化ごんげのすがたこそ、それからの孔明の全生活、全人格であつた。

ゆえに原書「三国志演義」も、孔明の死にいたると、どうしても一応、終局の感じがするし、また三国争覇そのものも、万事休やむ——の観なきを得ない。

おそらくは読者諸氏もそうであろうが、訳者もまた、孔明の死後となると、とみに筆を呵かす興味も氣力も稀薄となるのを如何いかんと

もし難い。これは読者と筆者たるを問わず古来から三国志にたいする一般的な通念のようでもある。

で、この迂著^{うちよ}三国志は、桃園^{とうえん}の義盟以来、ほとんど全訳的に書いてきたが、私はその終局のみは原著にかかわらず、ここで打ち切っておきたいと思う。即ち孔明の死を以て、完尾としておく。

原書の「三国志演義」そのままに従えば、五丈原以後——「孔明計ヲ遺シテ魏延ヲ斬ラシム」の棧道^{さんどう}焼打ちのことからなお統^{ハカリゴトコ}いて、魏帝曹叅^{そうえい}の栄華期と乱行^{らんぎよう}ぶりを描き、司馬父子の擡^た頭^{いとう}から、呉の推移、蜀破滅、そして遂に、晋^{しん}が三国を統一するまでの治乱興亡をなお飽くまでつぶさに描いているのであるが、そこにはすでに時代の主役的人物が見えなくなつて、事件の輪^{りんか}

郭も小さくなり、原著の筆致もはなはだ精彩を欠いてくる。要するに、龍頭蛇尾りゅうとうだびに過ぎないのである。

従つて、それまでを全訳するには当たらないというのが私の考えだが、なお歴史的に観て、孔明歿後の推移ほつぎも知りたいとなす読者諸氏も少なくあるまいから、それはこの余話の後章に解説することにする。

それよりも、原書にも漏れている孔明という人がらについて、もつと語りたいものを多く残しているように、私には思える。それも演義本にのみならず、他の諸書をも考合こうごうして、より史実的な「孔明遺事」こうめいいじともいうべき逸話や後世の論評などを一束いつそくしておくのも決して無意義ではなからう。それを以てこの「三国志」

の完結の不備を補い、また全篇の骨胎をいささかでも完きに近
いものとしておくことは訳者の任でもあり良心でもあろうかと思
われる。

以下そのつもりで読んでいただきたい。

二

布衣の一青年孔明の初めの出現は、まさに、曹操の好敵手と
して起った新人のすがたであつたといつてよい。

曹操は一時、当時の大陸の八分までを席卷して、荊山楚水こ
とごとく彼の旗をもつて埋め、

「呉の如きは、一水の長江に恃たのむ保守国のみ。流亡りゅうぼうこれ事と

している玄德の如きはなおさらしいに足らない」

とは、その頃の彼が正直に抱いていた得意そのものの氣概であつたにちがひなからう。

それを彗星すいせいの如く出でて突如挫折ざせつを加えたものが孔明であつた。また、着々と擡頭たいとうして來た彼の天下三分策の動向だつた。

曹操が自負満々だつた魏の大艦船団が、烏林うりん、赤壁せきへきにやぶれて北に歸り、次いでまた、玄德が荊州を占領したと聞いたとき、彼は何か書き物をしていたが、愕然がくぜん、耳を疑つて、

「ほんとか？」

と、筆を取り落したということは、魯肅伝ろしゆくでんにも記載されてい

るし、有名な一挿話となっているが、それをみても如何に彼が、無敵曹氏の隆運を自負しきつていたかが知れる。

しかも以後、

(劉備りゅうび麾下きかに青年孔明なるものがある)を、意識させられてからというものは、事ごとに、志とたがい、さしもの曹操もついに、身の終るまで、自己の兵を、一步も江漢へ踏み入らせることができなかつた。

——とはいへ、曹操という者の性格には、いかにも東洋的英傑の代表的な一塑像そどうを見るようなものがある。その風貌ばかりでなくその電撃的な行動や多感な情痴と熱においても、まことに英雄らしい長所短所の両面を持っていて、「三国志」の序曲から中篇

までの大管絃樂は絶えず彼の姿によつて奏されているというも過言でない。

劇的には、劉備、張飛、関羽の桃園義盟とうえんぎめいを以て、三国志の序幕はひらかれたものと見られるが、真の三国史的意義と興味とは、何といつても、曹操の出現からであり、曹操がその、主動的役割をもっている。

しかしこの曹操の全盛期を分水嶺として、ひとたび紙中に孔明の姿が現われると、彼の存在もたちまちにして、その主役的王座を、ふいに襄陽じょうよう郊外から出て来たこの布衣ほいの一青年に譲らざるを得なくなっている。

ひと口にいえば、三国志は曹操に始まって孔明に終る二大英傑

の成敗争奪の跡を叙したものとしようもさしつかえない。

この二人を文芸的に観るならば、曹操は詩人であり、孔明は文豪といえると思う。

痴や、愚や、狂に近い性格的欠点をも多分に持っている英雄として、人間的なおもしろさは、遙かに、孔明以上なものがある曹操も、後世久しく人の敬仰けいぎやうをうくることにおいては、到底、孔明に及ばない。

千余年の久しい時の流れは、必然、現実上の両者の勝敗ばかりでなく、その永久的生命の価値をもあきらかに、曹操の名を遙かに、孔明の下に置いてしまった。

時代の判定以上な判定はこの地上においてははない。

ところで、孔明という人格を、あらゆる角度から観ると、一体、どこに彼の真があるのか、あまりひょうびょう縹渺として、ちよつと捕捉できないものがある。

軍略家、武將としてみれば、実にそこに真の孔明がある気がするし、また、政治家として彼を考えると、むしろそのほうに彼の神髓しんずいはあるのではないかという気もする。

思想家ともいえるし、道德家ともいえる。文豪といえば文豪というもいささかもさしつかえない。

もちろん彼も人間である以上その性格的短所はいくらでも挙げられようが、——それらの八面玲瓏れいろうとうともいえる多能、いわゆる玄德が敬愛おかなかった大才というものはちよつとこの東洋の古

今にかけても類のすくない良元帥りようげんすいであつたといえよう。

良元帥。まさに、以上の諸能を一将の身にそなえた諸葛孔明しよかつこそ、そう呼ぶにふさわしい者であり、また、真の良元帥とは、そうした大器でなくてはと思われる。

とはいえ、彼は決して、いわゆる聖人型の人間ではない。孔孟の学問を基本としていたことはうかがわれるが、その真面目はむしろ忠誠一箇な平凡人というところにあつた。

三

彼がいかに平凡を愛したかは、その簡素な生活にも見ることが

できる。

孔明がかつて、後主劉禪こうしゅりゆうぜんへささげた表ひょうの中にも、日頃の

生活態度を、こう述べている。

——成都二桑百株ソウシユハクデン、薄田十五頃ケイアリ。

子弟ノ衣食オノズカヨジヨウ、自ラ余饒ヨウアリ。臣二至リテハ、外二任アリ。別

ノ調度ナク、身二随シタガウノ衣食コトゴト、悉ク官二仰ヨウゲリ。別二生ヨハクヲ治メ

テ以テ尺寸ヲ長ズルナシ。モシ臣死スルノ日ハ、内二余帛ヨハクアリ、

外二贏エイザイ財アラシメテ、以テ、陛下二背ソムカザル也。

重要な国務に参与する者の心構えの一つとして、孔明はこれを生
活にも実践したものであろう。後漢以来、武臣ぜに銭を愛すの弊風
は三国おのおのの内にも跡を絶たなかったものにちがいない。

無私忠純の龜鑑きかんを示そうとした彼の氣もちは表の辭句以外にもよくあらわれている。

彼は清廉せいれんであるとともに、正直である。兵を用いるや神算しんさん鬼謀きぼう、敵をあざむくや表裏不測ふそくでありながら、軍を離れて、その人間を觀るときは、実に、愚ぐともいえるほど正直な道をまつすぐに歩いた人であつた。

子のように愛していた馬謖ばしよくを斬つたなども、そのあらわれの一つといえるし、また、劉玄徳が死に臨んで、

「遺孤みなしごの身も、国の後事も、一切をあげて託しておくが、もし劉禪が暗愚あんぐで蜀の帝王たるの資質がないと卿けいが觀るならば、卿が帝位に即ついて、蜀を取れ」

と、遺言したにかかわらず、彼は毛頭そんな野心は抱かなかった。

だから晩年、年を次いでの北伐遠征には、ずいぶん孔明に従つて行つた将士が、他山の屍しかばねとなつて歸らなかつたが、蜀中の戦死者の遺族も、決して、彼にたいして怨嗟えんさしなかつた。

のみならず、孔明の死に会うや、蜀の百姓は、廟びやうを立て、碑ひを築き、彼の休んだ址あとも、彼の馬をつないだ木も、一木一石の縁、みな小祠しょうしとなつて、土民の祭りは絶えなかつた。

また、彼は内政と戦陣にかかわらず、賞罰には非常に厳しかつたので、彼のために左遷させんさせられたり逼塞ひっそくしたのもずいぶんあつたが、すべて彼の「私なき心」には怨む声もなく、かえつて

孔明の死後には、そうした人々までが、

「――再び世に出る望みを失った」

と、みな嘆いているほどである。

「いやしくも一国の宰相でありながら、夜は更けて寝ね、朝は夙^{つと}に起きいで、時務軍政を見、その上、細かい人事の賞罰までにいちいち心を^{つか}勞い過ぎているのは、真の大器量でないし、また、蜀にも忠に似てかえつて忠に非ざるものである」

という彼への論評などもないではなく、後世の史家は、そのほかにいろいろな孔明の短所をかぞえあげているが、要するに、国を憂いて瘦^{そうく}軀を削り、その赤心も病^{わづら}み煩うばかり日々夜々の戦いに苦闘しつつあった古人を、後世のご苦勞なしの文人や理論家が、

暖衣飽食しながら是々非々論じたところで、それはことば

の遊戯以外の何ものでもないのである。いわんや晩年数次にわたる北魏進撃と祁山滯陣中の労苦とは、外敵の強大なばかりでなく、絶えず蜀自体の内にさまざまな憂うべきものが蔵されておつたような危機に於てをやである。

思うに、孔明はまったく、その体が二つも三つも欲しかったろう。或いは、その天寿を、もう十年とも、思つたであらうと察しられる。

やはり彼の真の知己は、無名の民衆にあつたといえよう。今日、中国各地にのこっている——駐馬塘とか、万里橋とか、武侯坡とか、樂山とか称んでいる地名の所はみな、彼が詩を吟じた

遺跡だとか、馬をつないだ堤だとか、人と相別れた道だとかいう語り伝えのあるところである。そういう純朴な思慕の中にこそ、むしろ彼の姿はありのままに、また悠久に、春秋の時をも超えて残されていると思う。

四

——しかし、ただ困るのは、民間の余りな彼への景仰けいこうは、時には度がすぎて、孔明のすべてを、ことごとく神仙視してしまうことである。

その二、三の例をあげると。

——孔明の女むすめは雲に乗つて天に上つた。それが葛女祠かつじよしとして

祭られたものだ。「朝ちようしん 真觀記記事」

——木牛流馬もくぎゆうりゆうばは入神の自動器械で、人の力を用いずひとり自でに

走つた。「戎州志じゆうしゆうし」

——彼は時計も作つた。その時計は、毎まい更こうに鼓を鳴らし、三

更になると、鶏の声を三唱する。「華夷考かいこう」

——孔明の用いた釜は今でも水を入るとひとりでにすぐ沸わく。

「丹鉛録たんえんろく」

——孔明の墳つかのある定軍山に雲がおりると今でもきつと撃鼓げきこの

声とがする。漢中の八陣の遺蹟には、雨がふると、関とのとき声とが起る。

「千宝晋記かんほうしんき」

そのほか探せば数限りないほどの類の口碑伝説はたくさんある。純朴愛すべきものもあるが、中には滑稽でさえあるものもある。「三国志演義」の原著書は、史実と伝説とを、充分に知悉していながら、しかも多分にそういう土語民情の中に伝えられている孔明の姿をも取り容れて、さらにそれを文学的に神仙化しているのである。彼の兵略戦法を語るに、六丁六甲ちようこうの術を附し、八門遁甲とんこうの鬼変を描写している件などはみなそうであるし、わけて天文氣象に関わることは、みな中国の陰陽五行いんようぎようと星曆せいれきに拠つたものである。

けれど五行ぎようかん観かんも、宿星学しゆくせいがくも、これは根深く、黄土大陸の庶民に、久しい間信ぜられていた根本の宇宙観であり、それと

結ばれていた人生観でもあったのだから、これを否定しては、

「三国志演義」は成り立たないことになる。またかくの如く民衆のあいだに長く読み伝えられてもこなかったにちがいない。――で、私のこの新訳「三国志」も、そういう箇所にかかる度、すくなくらず苦勞が伴った。近代の読書人に対しては何としても余りに怪力乱神の奇異を語るに過ぎなくなるからである。ただその点において救われ得る道は、ただ一つ詩化あるのみであった。その点は原書も大いに意を用いたらしく思われるが、私の場合も、一種の民族的詩劇を描くつもりで書いていった。同時に、そうした妖^{あや}しき粉^{ふん}彩^{さい}も音楽も、背景も一切削除するなく、原書のまま書きすすめた。

ちと横道へそれたが、中国の民衆が、時経つほど、いかに孔明を神仙視したかという話では、唐代になつてからでも、こんな挿話がひろく行われていたのを見てわかる。

——唐ノ頃、盗^{トウ}アリ、先主ノ墳^{ツカ}ヲ発^{アバ}ク。盗^{トウ}数名。齊^{ヒト}シク入リシニ、人アリ、燈下ニ対シテ碁^ゴヲ囲ムモノ兩人、側^{ジエイ}ニ侍衛スルモノ十数名ヲ見ル。

盜、怖レテ拜ス。其^{ソノトキ}時、座ノ一人、顧ミテ盜ニ曰ク。汝等、能ク飲ムカト。

而シテ、各ニ美酒一杯ヲ飲マセ、マタ玉帶数条ヲ出シテ頒^ワケ与^{アト}ウ。

盜、畏^{イシン}震シテ、速ヤカニ坑^{アナ}ヲ出デ、相顧ミテ、モノヲ云ワン

トスレバ、唇^{クチ}ハ皆、漆^{ウルシ}ニ閉ジラレテ開カズ、手ノ玉帶ヲ見レバ、各、怖ロシゲナル巨蛇^{キョダ}ヲ掴^{ツカ}ミテアリシト。後二里人二問エバ、
 此^{コノリヨウ}陵^{シヨカツ}ハ諸葛武侯ガ造ル所ノモノナリト曰^イウ。
 これは「談叢^{だんそう}」という一書のうちに見える記事である。

書物の話が出たついでに孔明の著作についていえば、兵書、經書、遺表の文章など、彼の筆になるものと伝えられるものはかなりある。しかし、多くは後人の編志、或いは代作が多いことはいうまでもない。

そのうちでも代表的な孔明流の兵書と称する「諸葛亮^{しよかつりよう}五法^{ごぽう}」などは日本にも伝わって、後のわが楠^{くすのきりゆう}流^{りゆう}軍学や甲州流そのほかの兵学書などと同列しているが、もとより信じられる

ものではない。

彼が、陣中でよく琴を弾じていたということから「琴経」という琴の沿革や七絃の音譜を書いた本も残されている。真偽は知らないが、孔明が多趣味な風流子であつたことは事實に近いようである。「歴代名書譜」にも、

——諸葛武侯父子、皆画ヲ能クス。

と見えるし、その他の書にも、孔明が画に長じていたことはみな一致して記載している。しかしその画と信じ得るようなものはもちろん一作も伝わっていない。

五

何事にも、几帳面きちようめんだったことは、孔明の一性格であつたように思われる。

孔明が軍馬を駐屯ちゆうとんした営壘えいるいのあとを見ると、井戸、竈かまど、障壁しょうへき、下水などの設計は、実に、縄墨じようぼくの法になつて、規矩整然たるものであつたという。

また、官府、次舎、橋梁、道路などのいわゆる都市経営にも、第一に衛生を重んじ、市民の便利と、朝門の威嚴とをよく考えて、その施設は、当時として、すこぶる科学的であつたようである。

そして、孔明自身が、自らゆるしていたところは、

謹慎きんしん

忠誠 ちゆうせい

儉素 けんそ

の三つにあつたようである。おおやけ公に奉ずること謹慎、王室につくすこと忠誠、身を持じすること儉素。——そう三つの自戒を以て終始していたといえよう。

こういう風格のある人に、まま見られる一短所は、謹嚴自らを持す余りに、人を責める時にも、自然、嚴密に過ぎ峻しゅん酷こくに過ぎる傾きのあることである。潔癖けつぺきは、むしろ孔明の小さい疵きずだつた。

たとえば日本における豊臣とよとみ秀吉の如きは、犀眼さいがん、銳意、時に嚴酷でもあり、烈しくもあり、鋭くもあり、抜け目もない英雄

であるが、どこか一方に、開け放しなところがある。東西南北四門のうちの一門だけには、人間的な愚も見せ、痴ちも示し、時にはぼんやりも露呈している。彼をめぐる諸侯は、その一方の門から近づいて彼に親しみ彼に甘え彼と結ぶのであつた。

ところが、孔明を見ると、その性格の几帳面さが、公的生活ばかりでなく、日常私生活にもあらわれている。なんとなく妄みだりに近づき難いものを感じさせる。彼の門戸にはいつも清浄な砂が敷きつめてあるために、砂上に足跡をつけるのは何かはばかられるような氣持を時の蜀人も抱いていたにちがいない。

要するに、彼の持した所は、その生活までが、いわゆる八門遁もん甲こうであつて、どこにも隙がなかった。つまり凡人を安息させる

開放がないのである。これは確かに、孔明の一短といえるものでなからうか。魏、呉に比して、蜀朝に人物の少ないといわれたのも、案外、こうした所に、その素因があつたかもしれない。

孔明の一短を挙げたついでに、蜀軍が遂に魏に勝つて勝ち抜き得なかつた敗因がどこにあつたかを考えて見たい。私は、その一因として、劉玄德以来、蜀軍の戦争目標として唱えて来た所の「漢朝復興」という旗幟きしが、果たして適當であつたかどうか。また、中国全土の億民に、いわゆる大義名分として、受け容れられるに足るものであつたか否かを疑わざるを得ない。

なぜならば、中国の帝立や王室の交代は、王道を理想とするものではあるが、その歴史も示す如く、常に覇道はどうと覇道との興亡を

以てくり返されているからである。

そこで漢朝というものも、後漢の光武帝が起つて、前漢の朝位を篡奪さんだつした王莽おうもうを討つて、再び治平を布しいた時代には、まだ民心にいわゆる「漢」の威徳が植えられていたものであるが、その後漢の治世も蜀帝、魏帝以降となつては、天下の信望は全く地に墜ちて、民心は完全に漢朝から離れ去つていたものなのである。

劉玄徳が、初めて、その復興を叫んで起つた時代は、実にその末期だった。玄徳としては、光武帝の故智に倣ならわんとしたものかもしれないが、結果においては、ひとたび漢朝を離れた民心は、いかに呼べど招けど——覆水フクスイフタタビ盆ボン二返ラズ——の觀があった。

ために、玄德があれほどな人望家でありながら、容易にその大を成さず、悪戦苦闘のみつづけていたのも、帰するところ、部分的な民心はつなぎ得ても、天下は依然、漢朝の復興を心から歓迎していなかったに依るものであろう。

同時に、劉備の死後、その大義名分を、先帝の遺業として承継いできた孔明にも、禍^か因^{いん}はそのまま及んでいたわけである。彼の理想のついに不成功に終った根本の原因も、蜀の人材的不振も、みなこれに由来するものと観てもさしつかえあるまい。

六

「三国志演義」のうちの本文にしばしば見るところの——身に鶴かくしょうを着、綸巾りんきんをいただき、手に白羽扇びやくうせんを持つ——という

彼の風采の描写は、いかにも神韻しんいんのある詩的文字だが、これを平易にいえば、

(いつも葛織きびらおりの帽をかぶり、白木綿しろもめんか白麻しろあさの着物をまとい、素木しらぎの輿こし、或いは四輪の車に乗って押されてあるいた)

という彼の簡易生活の一面を、それに依ってうかがうことができるのである。

彼には初め子がなかった。

で、兄の諸葛瑾しよかつきんの次男きよう、喬きようをもらって養子としていた。瑾きんは

呉の重臣なので当然、その主孫権のゆるしを得たうえで蜀の弟へ

送つたものであらう。

この喬は、叔父や父のよい所にも似て、将来を嘱望され、蜀の馬都尉に役付やくづきして、時には養父孔明に従つて、出征したこともあるらしいが、惜しいかな、二十五で病死した。

孔明の家庭はまたしばらく寂寥せきりようだったが、彼が四十五歳の時、初めて実子の瞻せんをもうけた。晩年の初子だけに、彼がどんなによるこんだかは想像に余りあるものがある。

かつ、瞻せんはたいへん才童であつたとみえ、建興十二年、呉にある兄の瑾きんに宛てて送っている彼の書簡にもこう見える。

瞻セン今スデニ八歳、聡慧ソウケイ愛スベシ、タダソノ早成、恐ラクハ重器チヨウキタラザルヲ嫌ウノミ

彼は八歳の児を見るにさえ、国家的見地からこれを観ていた。

その年、孔明は征地に歿したのである。遺愛の文房のうちから、「子をいまし誠むる書」というのが出てきた。

その後、瞻は十七の時蜀の皇妹と結婚、かんりん翰林中郎将に任ぜられた。

父の遺徳は、みな瞻の上に幸いして、善政があるとみな瞻のなしたようにいわれた。しかし、その名声はすこしいっぴ溢美に過ぎていたようである。孔明が生前すでに観ていたように、

（この子、おそらくは大器にあらず）

という所がやはり瞻の實質であつたようである。

蜀亡ぶの年、瞻は、三十七で戦死した。

子の尚しょうもまだ十六、七歳であつたが、長駆、魏軍のなかに突き入つて奮戦の末、果敢な死をとげた。

決して、国家の大器ではなかつたにせよ、孔明のあとは、その子、その孫も、共に国難に殉じて、みな父祖の名を辱はづかしめなかつた。尚の下にも、なお小さい弟があつたといわれるが、この人の伝はわからない。また、孔明には他の母系もあつたという説もあるが、それも真偽はさだかでない。

孔明の家系は、こうしてもとの草裡そうりに隠れてしまつたが、この諸葛氏しよかつしなる一門からは、この三国分立時代に、三人の将相を同族から出していたのみでなく、その各が、蜀、魏、呉と別れていたのは一奇観であつた。

すなわち、孔明は蜀に、兄の瑾は呉に、従兄弟の誕は魏に。そして誕のことは余りいわれていないが、一書に、

——諸葛氏ノ兄瑾、弟誕、並ビテ令名アリ。各一國ニ在ルガ故、人以テ曰ウ、蜀ハ龍ヲ得タリ、呉ハ虎ヲ得タリ、而シテ、魏ハソノ狗ヲ得タリト。

これは少し酷評のようである。誕は分家の子で早くから魏に仕え一方の将をしていたが、孔明と瑾の間のように親交がなかったので、三国志中にもあまり活躍していないだけにとどまるのだ。ただ、後に魏を取った司馬晋に叛いて敗れ去ったため、晋人の筆に悪く書かれてしまったものとみえる。

誕についても、語ることは多いが、余りに横道にそれるから略

す。孔明死後の蜀のことは後に略説する。しかし彼の死後なお三十年間も蜀が他国に侵おかされなかつたのはひとえに彼の遺法余徳が、死後もなお国を守っていたためであつたといつても過言ではあるまい。

七

頼山陽の題詩「仲達、武侯の營址えいしを觀みる図に題す」に、山陽はこういつている。

——公論ハ敵讐シユウヨリ出ヅルニ如シカズ、と。

至言である。山陽は、仲達が蜀軍退却の跡に立つて、

「彼はまさに天下の奇才だ」

と、激賞したと伝えられている、そのことばをさしていったのである。これ以上、孔明を論じ、孔明を是々非々してみる必要はないじゃないか——と世の理論好きに一句止めをさしたものといえよう。

だが、ここでもう一言、私見をゆるしてもらえるなら、私はやはりこう云いたい。仲達は天下の奇才だ、といったが、私は、偉大なる平凡人と称^{たた}えたいのである。孔明ほど正直な人は少ない。律義実直である。決して、孔子孟子のような聖賢の円満人でもなければ、奇矯なる快男児でもない。ただその平凡が世に多い平凡とちがって非常に大きいのである。

彼が、軍を移駐して、ある地点からある地点へ移動すると、かならず兵舎の構築とともに、附近の空閑地に蕪かぶ（蔓まん菁せいともよぶ）の種を蒔まかせたということだ。この蕪は、春夏秋冬、いつでも成育するし、土ど壤じょうをえらばない特質もある。そしてその根から莖くきや葉まで生なでも煮ても喰べられるという利便があるので、兵の軍糧副食物としては絶好の物だったらしい。

こういう細かい点にも気のつくような人は、いわゆる豪快英偉な人物の頭脳では求められないところであろう。正直律義な人にして初めて思いいたる所である。とかく青い物の栄養に欠けがちな陣中食に、この蕪かぶはずいぶん大きな戦力となったにちがいない。戦陣を進める場合も、そのまま、捨てて行つて惜し気もないし、

また次の大地ですぐ採取することができる。で、この蔓菁まんせいの播は植しょくは、諸所の地方民の日常食にも分布されて、今も蜀の江陵地方の民衆のあいだでは、この蕪しよかつさいのことを「諸葛菜」とよんで愛食されているという。

もうひとつ、おもしろいと思われる話に、こんながある。蜀が魏に亡ぼされ、後また、その魏を征して桓温かんおんが成都に入った時代のことである。その頃、まだ百余歳の高齢を保って、劉禅帝時代の世の中を知っていた一老翁があつた。

桓温は、老翁をよんで、

「おまえは、百余歳になるというが、そんな齡としなら、諸葛孔明が生きていた頃を知っているわけだ。あの人を見たことがあるか」

と、たずねた。

老翁は、誇るが如く答えた。

「はい、はい。ありますとも、わたくしがまだ若年の小吏の頃でしたが、よく覚えておりまする」

「そうか。では問うが、孔明というのは、いったいどんなふうな人だったな」

「さあ？ ……」

訊きかれると、老翁は困ったような顔をしているので、かんおん桓温が、同時代から現在までの英傑や偉人の名をいろいろ持ち出して、

「たとえば……誰みたいの人物か。誰と比較したら似ていると思うか」と、かさねて問うた。

すると、老翁は、

「わたくしの覚えている諸葛丞相は、べつだん誰ともちがつた所はございません。けれども今、あなた様のいらつしやる左右に見える大将方のように、そんなにお偉くは見えませんでした。ただ、丞相がおなくなりになってから後は、何となく、あんなお方はもうこの世にはいない気がするだけでございます」

と、いったということである。

仲達の言もよく孔明を賞したものであろうし、山陽の一詩も至言にはちがいないが、私は何となくこの老翁のことばの中にかえつてありのままな孔明の姿があるような気がするのである。

丞相ノ祠堂シドウ 何レノ処イヌニ力尋タズネン

錦管城外 柏森々

階二映ズ 碧草自ラ春色

葉ヲ隔ツ黄鸝 空シク好音

三顧頻繁ナリ 天下ノ計

兩朝開濟ス 老臣ノ心

師ヲ出シテ未ダ捷タズ 身先死ス

長ク英雄ヲシテ 涙襟ニ満シム

孔明を頌した後人の詩は多いがこれは代表的な杜子美の一詩である。
陽の廟前に後主劉禪が植えたという柏の木が、

唐時代までなお繁茂していたのを見て、杜子美がそれを題して詠ったものだといわれている。

後蜀三十年ごしよくねん

一

孔明なき後の、蜀三十年の略史を記しておく。

いったい、ここまでの蜀は、ほとんど孔明一人がその国運を担になっていたといつても過言でない状態にあつたので、彼の死は、即ち蜀の終りといえないこともない。

しかし、それは孔明自身が、以て大いに、自己の不忠なりとし、またひそかなる憂いとしていた所でもある。

従つて、自身の死後の備えには、心の届くかぎりのことを、その遺言にも遺風にも尽してある。

以後、なお蜀帝国が、三十年の長きを保つていたというも、偏ひとえに、「死してもなお死せざる孔明の護り」が内治外防の上にあつたからにほかならない。

そこで孔明の歿した翌年すなわち蜀の建興十三年にはどんなことがあつたかというに、蜀軍の総引揚げに際し、棧さんどう道の嶮けんで野心家の魏延ぎえんを誅ちゆう伐ばつした楊儀も、官を剥はがれて、官嘉かんかに流され、そこで自殺してしまった。

延は儀を敵視し、儀は延を邪視し、この二人は、すでに孔明の生前から、互いによからぬ仲であつたが、孔明の大度がよくそれ

を表面に現わすなく巧みに使ってきたものに過ぎなかった。

それというのが二人ともひそかに、孔明の死後は、われこそ蜀の丞相たらんと、おのおの、その後継をめぐつて相争っていたからである。

かつて、呉の孫権は、蜀の使いに、孔明の左右にある重臣はたれかと訊ね、

「さてさて、儀や延を両腕にして戦っているのでは、さだめし孔明も骨が折れるだろう」

と、同情的な口吻こうふんのうちに、延や儀の人物を嘲ちやうひよう評していたという話もあるが、たしかに、この二人物は、蜀陣營の中の、いわゆる厄介者やっかいものにちがいはなかった。

「――延は矜きやうこう高。儀は狷けんかい介」

とは、孔明が生前にも、呟いていた語であつた。――で彼は、そのいづれにも後事を託さず、かえつて、平凡だが穩健な蔣しやうえ琬はんと費ひい禕ひいとに囑しよくすところ多かつたのである。

楊儀の失脚も、結局、その不平から起つたもので、彼は、成都に歸つて後、さだめし大命われに降るものと、自負していたところ、なんぞはからん、重命は琬えんに降り、自分は中將軍師を任ぜられたに過ぎないので、以後、しきりに余憤をもらし、あまつさえ不穩な行動に出んとする空氣すらうかがわれたので、蜀朝は、これに先んじて、彼の官を剥ぎ、官嘉の地に流刑するの決断に出たものであつた。

これが、孔明死後の成都に起つた第一の事件であつた。支柱を失うと、必ず内争始まるという例は、一国一家も変りがない。蜀もその例外でなかつた。

けれど、しょうえん蔣琬はさすがに、善処して、あやま過らなかつた。彼はまず尚書令となつて、国事一切の処理にあたつたが、衆評は、彼に対して、

「あの人は平凡だが、平凡を平凡として、威張らず銜てらわず、挙止、ありのままだから至極よい」

と、みな云つた。

孔明が、彼を挙げたのも、その特徴なきところを特徴として、認めていたからであつたろう。

十三年四月。

琬えんは、大將軍尚書令に累進したので、そのあとには費ひ禕が代つて就任した。また、呉懿ごいが新たに車騎將軍となつて、漢中を總督することになつた。

遠征軍の大部分は引揚げても、漢中は依然、蜀にとつて、重要な前衛基地であつた。なお多くの国防軍はそこに駐屯していた。呉懿ごいの赴任は、その為にはほかならない。

ここに、たちまち豹ひょう変へんをきざ兆しはじめたのは、同盟国の呉であつた。その態度は、孔明の死と同時に、露骨なものがあつた。

「いま、蜀を救急しなければ、蜀は魏に喰われてしまうであろう」これを名目として、呉は、数万の兵を以て、蜀国境の巴丘はきゅうへ

出て来た。この物騒きわまる救援軍に対して、蜀も直ちに、兵を派して、

「ご親切は有難いが、まず大した危機もこの方面にはないからお引揚げ願いたい」

と、対峙^{たいじ}の陣を布^しいた上、こう外交折衝に努めたので、呉もついに、火事泥的な手を出し得ずに、やがて一応、国境から兵を退いた。

二

建興十五年、蜀は、延^{えんき}と改元した。

この年、蔣しょうえん琬は、討魏の軍を起して、漢中に出で、ひそかに、魏の情勢をうかがっていた。

孔明なき後も、劉玄徳以来の、中原進出の壮志は、まだ多くの遺臣のうちには、烈々と誓われていたことが分る。

琬えんは、孔明がいつも糧道の円滑に悩んでいた例を幾多知っていたので、こんどは水路を利用して魏へ入ろうとして建議したが、蜀の朝廷では、

「北流する水を利用して進むは、入るに易やすい道には違いないが、ひとたび退こうとするときは、流れを溯さかのぼ上るの困難に逢着するであらう」

といって、ついに彼の建議をゆるさなかった。これは、その作

戦を否定したばかりでなく、すでに遠征を好まない空気が、ようやく、廟議の上にも顕著けんちよとなった一証だと見てよい。

「守らんか、攻めんか」

蜀の輿論よろんは、ここ数年を、ほとんどそのいずれともつかずに過ごした。

そのうちに、延 七年の三月、魏は蜀の足もとを見て、

「いまは一撃に潰ついえん」

となし、すなわち曹爽そうそうが総指揮となって、十数万の兵を率い、

長安を出て、駱口らっこくを経、積年うかがうところの漢中へ、一挙突入せんとした。

ところが、蜀軍いまだ衰えずである。蜀は、その途中に邀撃ようげき

して、魏を苦戦に陥らしめた。

費^ひ禕^いの援軍が早く来たのと、^{ばい}方面に蜀兵の配置が充分であつたため、たちまち、魏軍を諸所に捕捉して、痛打を加え、特有な嶮路を利用して、さんざんに敵を苦しめたのである。

「いけない、なお未だ孔明の遺風は生きている」

曹^{そう}爽^{そう}はそういつて退却した。

その翌年、蜀の蔣^{しょう}琬^{えん}は死んだ。

蜀の良将はこうして一星一星、^{あかつき}暁の星のように姿を消して行つた。何かしらん力を以ては及び難いものが蜀の年々に黒^{くろ}框^{わく}の歴史事項を加えていた。

蔣琬はついに丞相にはならなかったが、孔明の遺^い囑^{しよく}を裏切ら

なかった忠誠の士であつたことに間違いない。

同年、十二月にはまた、尚書令しょうしよれいの董允とういんが死んだ。允いんは琬えんに次ぐ重臣であり、剛直をもつて鳴つていたので、琬の死以上、これを惜しむ人もあつた。

この二者が亡ぶと、

「わが世の春が来た」

といわぬばかりに擡頭たいとうしてきた一勢力がある。宦人かんじんの黄こうこ

皓うを中心とする者どもである。皓は日頃から帝の寵愛を鼻にか

けていたが、政治に容喙ようかいし始めたのは、このときからである。

骨のある忠臣は相次いで世を去るにひきかえ、こういう類たぐいの者が

内政から外務にまで新たに面かおを出すにいたつては、もはやその国

の運命は量^{はか}り知るべきである。

だが、ここになお、いささか蜀のために意を強うするに足るものはあつた。それは、費^ひ禕^い、姜^{きやう}維^いの兩人が健在なことだ。以後、彼らが銳意国政に當つて、この衰亡期にある国家を支え、故孔明の遺志にこたえんとする努力には、涙ぐましいほどなものがある。ただ——これは結果論となるが——姜^{きやう}維^いのただ一つの欠点であつたことは、孔明ほどな大才や機略にはとうてい及ばない自己であるを知りながらも、その誓うところ余りに大きく、その任あまりに多く、しかも功を急ぐの結果、彼の英身が、かえつて蜀の瓦解^{がかい}へ拍車をかけるの形をなしてしまつたことである。

さもあらばあれ、武人として、また唯一の遺法を、孔明手ずか

ら授けられた彼としては、

(玉^{ぎよくさい} 砕^か、貫^{かんてつ} 徹^か)

まさにこの二途を賭して、あくまで積極的に出るしか生きがいはなかったであろう。

で彼は、かねて、涼州地方の^{きよう}族を懐柔していたので、この一

勢力を用いて、魏へ進攻する策を企てた。

その実現を見たのは、延^{えんき} 十年の秋である。維^いは、雍^{ようしゅう} 州

へ攻め入った。

魏の郭^{かくわい} 淮^{ちんたい}、陳^{ちんたい} 泰^{たい}などが、この防戦に当り、各地で激烈な戦

鬭を展開したが、結局、魏の諸郡を踏み荒した程度で、蜀は退却のやむなきに至った。魏に退路を断たれ、また部下から多くの脱

走者を出したりしたためだった。

三

ここにまた、蜀にとって一不幸が起った。費禕ひいの死である。

孔明の衣鉢いはつをつぐ大器としては、まず費禕であろうとは、衆目の視ていたところであつたが、突然、この計ふが知れわたつたので、蜀中は非常な哀愁につつまれた。

死因も、その折は、秘密にされていたが、後に自然一般にも知れてしまった。一夕、蜀の將軍連と歓談している宴席において、突然、魏の降将、郭循かくじゆんという者に刺し殺されたのであつた。

費禕なき後、蜀の運命は、いよいよ姜維きやうい一人の双肩にかかった。

維は、十八年八月、魏の王経おうけいと洮西とうせいに戦つて、久しぶりの大戦果をあげた。この時の殲滅せんめつには、魏兵万余人を斬り尽して、洮西の山河をほとんど紅くれないにしたといわれている。

ために、彼は大將軍に叙せられた。

しかしすぐ次の戦いには、魏の名将鄧艾とうがいと段谷だんこくにまみえて、こんどは逆に惨敗を喫した。

若きから孔明に私淑ししゆくして来たものの、孔明に似て孔明にとどかず、その人格に力量に、如何ともなし得ぬ先天的な器量の差は、こういう風に、軍をうごかすたび、歴然と結果に出てくる。

延 二十年。維は秦川^{しんせん}を衝いた。

魏軍が関中方面へ移動したのでその虚をついたものである。

魏の鄧艾^{とうがい}・司馬望^{しばぼう}の軍は、彼の鋭鋒を避けて、敢えて当らな

かった。維はさまざまに挑んだが、消耗するに止まって、大した戦果も獲られずに終った。

彼が、孔明の遺志をついで、しきりに積極的となっていた背後には、内廷における黄皓^{こうこう}らの反戦的空氣が、ようやく濃厚になりかけていた。

かくては維も思うように戦えなかった。国家として、まことに危険な状態にあったといわねばならない。

延^{えんき}の年号は、二十年を以てあらためられ、景耀^{けいよう}元年となつ

た。帝劉禪は、この頃からようやく国政に倦み、日夜の歡宴に浸りはじめた。時艱に耐うる天質のいとど薄い蜀帝をして、この安逸へ歡樂へと誘導するに努めていたものが、黄皓などの宦臣の一群であつたことはいうまでもない。

「ああ、国は危うい」

「かくては、蜀の落日も、一燦のうちであろう」

心ある者はみな歎いた。

しかし、帝の寵威を誇る黄皓にたいして、齒の立つ者はいなかつた。

ひとり姜維は、面を冒して、諫奏幾度か、
「佞臣を排されたい」

と、劉禪の賢慮を仰いだ。

饅^すえたる果物籠の中にあつて、一箇の果物のみ饅えないでいるわけもない。帝の心はすでに甘言のみを歡ぶものになっている。朝^{あした}に美姫^{びき}の肩^{かた}の柳^{りゅう}絮^{じよ}を払い、夕^{ゆふ}べに佳酒^{かしゆ}を瑠璃杯^{るりはい}に盛つて管絃に酔う耳や眼をもつては、忠臣の諫言は余りにもただ苦い氣がした。

「蜀は風前の燈火^{ともしび}だ」

維^いは、慨嘆した。

果たせるかな、魏は、

「時^{とき}到る」

とこれを見ていた。そして景耀^{けいよう}六年の秋、一挙に蜀中に攻め

入つて、その覆滅ふくめつを遂とぐべしと、鄧艾とうがい、鍾会しょうかいを大将として、無慮数十万の大兵は、期して、魏を殄し、漢中へ進撃した。

蜀の前衛は、たちまち潰ついえた。

姜維きやういは、劍閣けんの嶮に拠り、この国難に、身を挺して防いだ。

さすがに、ここは容易に、抜けなかった。

けれど一方、陰平いんぺいの險隘けんあいを突破した鄧艾とうがいの軍は、ときす

でに蜀中を席卷し、直ちに成都へ突入していた。

成都。ああ、成都。

彼ら蜀人は、ここに魏兵を見ようなどとは、まったく夢想もしていなかったのである。殺到する魏の大軍を見て初めて、

「これは、この世のことか」

と、狼狽ろうばいした程だったという。

ためにこのとき、城郭の防備などは、少しもしていなかったといわれている。知るべし、跳ちようりよう梁する敵人の残虐ぶりを。魏兵の蹂躪じゆうりんに悲鳴して逃げまどう婦女老幼のまじめさを。——かかるとき、なお毅然としてある都門第宅の輪奐りんかんの美も、あらゆる高貴を尊ぶ文化も、日頃の理論や机上の文章も、ついに何の役をもなさなかった。むなしく災いわざわの暴威と敵兵の濶歩かつぽにおののくだけであった。

四

蜀宮は混乱した。

ここもまた、かつての、洛陽の府や長安の都そのままの日を現出した。

帝劉禪には、何らの策も決断もない。妃きさきとともに哭なき、内官たちと共にうろたえているのみである。

魏軍はすでに城下へ迫つて歌っている。蜀亡びぬ、蜀すでに亡なし。有るはただ城門を開いて魏旗の下にひざまずく一事のみと。

「どうしたらよいか。汝らの意見に従おう。ただ朕ちんの為に善処せよ」

劉禪りゅうぜん

は、これを告ぐるのがやつとであつた。夜来の重臣会

議もまだ一決も見ずにある。沈湎ちんめん蒼白そうはく、誰の顔にも生氣はな

い。

「呉を恃たのみましよう。陛下の御輦みくるまを守つて、呉へ奔はしり、他日の再起を図らんには、またいつか蜀都に還幸の日が来るにちがいありませぬ」

「いや呉は恃たのみ難い。むしろ呉は、蜀の滅亡をよろこぶ者であつても、蜀のために魏と戦うような信義のないことは、丞相孔明の死去のときから分りきつてゐる」

「いっそ、南方へ蒙塵もうじんあそばすのが、いちばん安全でしょう。南方はまだ醇朴じゅんぼくな風があるし、丞じょう相孔明が布しいた徳はまだ民の中に残つてゐます」

衆論は区々まちまちである。帝はただ迷うばかりだった。

ときに重臣のしやうしゆう周が、やつと不器用な口つきで、最後に私見を述べた。

「もの事にはすべて、始めがあり終りがあり、また中道がありません。始めや途中のことなら一時の変ですから、挽回ばんかいの工夫もあり、立て直しもききますが、今日の変は、要するに、丞相孔明が逝ゆかれた後の万事の帰着です。天数の帰結です。もういけません。呉はしへ奔はしるも愚策、南方に蒙塵もうじんあるも、何もかも、唯、末路の醜態を加えることでしかありません。……願うらくはただ、努めて先帝の御徳おんとくを汚さぬよう、蜀帝国の最期として、世の嗤わらい草ぐさにならぬよう、それのみを祈りまする」

「では、汝は、蜀城を開いて、魏に降伏するのがよいというのか」

「臣として、口になし得ないことですが、天命にお従い遊ばすならば、それしかほかに途みちはありません」

案外にも、劉禪はすぐ、

「そうしよう。周のいうことが、いちばん良いようだ」

といって、むしろ一時の眉をひらくような容子にさえ見えた。

重臣はみな痛涙に咽むせんだ。けれど誰も皆、周の意見が悪いものとは思わなかった。

あきら諦めの底に沈黙した。

この周については、有名な一挿話がある。

彼が初めて蜀宮に召されたのは建興の初年頃で、まだ孔明の在世中であつた。

孔明は彼の学識と達見つとを夙つとに聞いていたので、帝にすすめて田

舎出の一学者を、勸学従事の職に登用したのである。

ところが、最初の謁見の日、蜀^{しよくちよう}朝の諸官は、彼のすこぶる

振わない風采と、また余りに朴^{ぼく}訥^{とつ}すぎて、何を問うても吃^{ども}つて

いっそう学識らしい話も場所柄に応じた答えもできないでいる容子をながめ、皆クツクツと失笑を洩らした。

「あのような不^{ふた}嗜^{しな}みなことは、朝廷の儀礼と尊容を甚^みだしく紊^{みだ}すものです。笑った者を処罰しようではありませんか」

廟^{びようどう}堂監察の吏^りは、問題として、これを取り上げ、一応、孔

明のところへ相談に来た。

すると、孔明はこういった。

「われなお忍ぶ能わず。いわんや左右の衆人をや」

彼は、取り上げなかった。

孔明は笑いはしなかったが、やはり心のうちで、おかしさを覚えていたのである。——自分の身にとってすら忍び得なかったことを、衆にたいして罪として問おうというのは法の精神に悖るとなしたものであらう。

孔明が戦場で死んだと聞いたとき、このしょうしゅう周はその夜のうちに成都を去って、はるばる途中までちようもん弔問に駆けつけて行つた。その以後、離京した者は、官吏服務規程に問われて、反則の咎をうけたが、真つ先に行つた周だけは、何の問責もうけなかった。——衆論に囚われず、劉禪に開城をすすめた彼は、まずそういう風な人物だったのである。

五

開城を宣すると、蜀臣はその旨を魏軍へ通告した。

城外には、魏軍の奏する楽の音や万歳の声が絶えまなく沸き立っている。蜀宮の上には降旗が掲げられ、帝は多くの妃や臣下を連れて城外へ出た。そして魏将鄧艾の軍門に、降をちかう、の屈辱に服したのであった。

かくて、蜀は、成都創府以来、二世四十三年の終りを、この日に告げたのであった。

昭烈廟（玄德を祀る所）の松柏森々と深き処、この

日、風はいかなる悲愁を調べていたろうか。

定軍山の雲高き処、孔明の眈まなじりはいかにふさがれていたろうか。

なおなお、関羽、張飛、そのほか幾多の父、幾多の子、また、

無数の英骨、忠臣、義胆の輩ともがらはいかに泉下の無念をなぐさめてい

たろうか。

かつて皆、この土のために、生命いのちをささげ、骨を埋め、土中に

蜀の万代を铸いのつていたろうに、今や地表は魏軍の土足にとどろき、

空は魏旗ぎきに染められている。

そもそも誰の罪か。

心なき蜀中の土民こそ嘆かぬはなかつたであろう。

ただここに、なお劉りゅう家の血液を誇った一皇子がある。帝劉禪

の五男北地王ほくちおうじん諡であつた。皇子は初めから帝の蒙塵もうじんにも開城にも大反対で、

「蜀宮を墳つかとしても、魏と最後の最後まで戦うべきです」

と主張していたが、ついに言は聴かれず、自分と共に討死しようという烈士もいないので、憤然ひとり祖父の昭烈廟へ行つて、妻子をさきに殺して自分もいさぎよく自殺した。

蜀漢の末路、ただこの一皇子あるによつて、歴史は依然、人心の真美と人業じんぎようの莊嚴を失っていない。

劍閣の嶮けんに拠つて、鍾会しゅうかいと対峙たいじしていた姜維きやういも、成都の開城を伝え聞き、また勅命に接して、魏軍に屈伏するのやむなきにいたつた。

「武器を拋棄ほうきせよ」

と姜維きやういに命ぜられて、魏の前に降兵として出ることになった彼の部下は、このとき皆、

「無念」

と、劍を抜いて、石を研きつたということである。

これを見ても、蜀人の意気戦志は、まだ必ずしも地に墜ちていたとはいえない。いやむしろ、孔明なき後の三十年も、年々、進取的な気概を外敵にしめし、「攻むるは守るなり」の積極策を持ちつづけて来た気力にはむしろ愕おどろかれるものがある。

とはいえ、姜維きやういらのこの意気は愛すべしだが、ために、費ひ禕いの言なども多くは耳をかさず、求めて欠陥を生じ、急いで国家を

危殆^{きだい}へ早めて来たこともまた、否み得ない作用であつたというしかない。

費^ひ禕^いは、存生中にも、姜維にむかつて、しみじみ、こういつていた事実がある。

「自分などは、どう鼻^ひ眉^い目^{きめ}に見ても、とうてい、故丞相に及ばないこと甚だ遠い者だ。——その丞相ですらなお中^{ちゅう}夏^{かう}を定め得なかつたことを思うと、況^いん^わや、われら如きにおいてをやと、痛感しないわけにはいかない。だからしばらくはよく内を治め、社^{しゃ}稷^{よく}を守り、令を正し、国を富ましめるのが、われらのなし得る限度ではあるまいか。外の功業の如きは、やがて孔明のような能者を待つて初めて望み得ることだ。僂^ぎ倖^{ようこう}を思つて、成敗を一

拳に決せんとするようなことは、くれぐれもおたがいに慎まなければなるまいと思う」

これは一面の善言であつた。

しかし姜維はべつに姜維の抱負を持しつづけた。いずれが是であつたか非であつたか、これはかえつて

しやうしゆう

周の最後のことば

に傾聴するものが多いようだ。

だが、過去を天地の偉大な詩として観るとき、姜維の多感熱情はやはり蜀史の華はなといえよう。彼はついに長く屈辱的武人たるに忍びきれず、後また、魏の鍾しやう会かいに反抗して、たちまちその手に捕えられ、妻子一族とともに、首を刎はねられた。彼の血液はやはり魏刀ぎとうに舂ちぬられるものに初めから約束されていたようである。

六

魏の成都占領とともに、蜀朝から魏軍の鄧艾^{とうがい}に引き渡された

国財の記録によると、

領戸^{りようこ}二十八万

男女人口九十四万

帶甲^{たいこう}将士十万二千人

吏^り四万人

米四十四万斛^{まんこく}

金銀二千斤

錦綺綵絹^{きんきさいけん}二十万匹

——余物これにかなう。

とあるからそのほかの財宝も思うべしである。

しかし国力はかなり疲弊ひへいしていたものだろう。蜀将の意気もす

でに昔日せきじつの比ではない。帝以下百官、城を出て魏門にひざまず

き、城下の誓いを呈したのである。いかなる国家も亡ぶとなると

実にあつけないものだ。

この亡滅を招いた原因は、数えれば種々ある。帝てい劉りゅう禪ぜんの闇あ

弱んじやく、楊儀の失敗、董允とういん、蔣琬しょうえんの死去、費禕ひいの奇禍きか、等

々、国家の不幸はかさなっていた。

最後となつては、劉禪の親政と、宦人かんじん黄皓こうこうの専横などが、

いよいよ衰すい兆ちように拍車をかけていた。亡ぶものの末期的症状に

かならず見られるのは、かんがんできないこう 宦官的内訌とこれに伴う暴政、そうこ 相剋、私的享樂などである。蜀の終り頃もこの例外を出ていない。

——特に、もつとも蜀を弱めたものは、蜀中の学者の思想分裂であつた。彼らのうちには、三国鼎立策にも大陸統合にも、ほとんど何の興味も感じていない者が多かつた。要するに思潮は戦に倦み戦を否定し始めていたのである。

門を閉じて、高く取り澄ましていた杜瓊とけいなども、春秋識しんちゆう中
の辞句をひき出して、

「漢に代るのは当塗高とうとこうだろう」

などと平気で放言していた。当塗高とは魏をさしていつているのである。魏という文字は「高閣」を意味する。——道に当りて

高いもの——という伏字だ。蜀の粟を喰いながら、こんなことを平気で説いていたのである。

また学府の学者でも、もつと甚だしい説を撒いていたのがある。「——先帝の名は備なり。備は、備うるなり、また具うるを意味す。後主の諱は禪にして禪るの意をもつ。すなわち禪り授くるなり。劉氏は久しからずして当に他へ具え禪るべし」

こういう学者を内に養っていた国家が内に病を起していないわけはない。いわゆる最後の「あつけなさ」は、すでに蜀の肉体のこういう危険な病症が平時に見のがされていたにほかならない。

ところで降人に出た劉禪の余生はどうなつて行つたろう。魏へ移った旧蜀臣は、おおむね魏から新しい官職を与えられて、

その隸属^{れいぞく}に甘んじた。劉禪もまた、魏の洛陽に遷^{うつ}され、後、魏から安樂公に封ぜられて、すこぶる平凡な日を過していた。

——ある時、彼の心懷を思いやって、魏人の一人が、彼の邸を訪うて面接したとき、試みに、

「魏へ来ても、日常のご不自由はないでしょうか、何かにつけ、蜀のむかしを思い出されて、折には、ご悲嘆にくるることもおありでしょうな」と、たずねてみた。

すると、凡庸な彼は、

「いやいや、魏のほうが、はるかに美味もあるし、気候もよいから、べつに蜀を思い出すようなこともありません」

と、いっこう無感情に答えたということである。

この無感情が、大悟たいごの無表現でもあつたなら偉いえらものであるが、彼の場合は、現れたとおりの、懸値かけねなしであるからまことに慙あわれというほかはない。

魏ぎから——晋しんまで

一

孔明の歿後、魏は初めて、枕を高うして眠ることを得た。

年々の外患もいつか忘れ、横おういつ溢する朝野の平和気分は、自然、

反動的な華美かびき享樂しょうらくとなつて現れだした。

この兆候は、下よりまず上から先に出た。大魏皇帝の名をもつて起工された洛陽の大土木の如きがその著しいものである。

朝陽殿、たいきよくでん大極殿、そうしようかん総章觀などが造営された。

また、これらの高楼、大閣のほか、すうかえん崇華園、せいしよういん青宵院、

ほうおうろう鳳凰楼、

九龍池などの林泉や別荘が人力と国費を惜しみなくか

けて造られた。これに動員された人員は、天下の工匠こうしよう三万余、

人夫三十万といわれている。

まさに、国費の濫費らんぴである。曹叡そうえいほどな明主にして、なおこ

の弊へいに落ちたかと思うと、人間性の弱点の陥おちいるところみな軌きを一

にしているものか、或いは、文化の自然循環と見るべきものか。

いずれにせよ、彫梁ちようりようの美、華棟かとうの妍けん、碧瓦へきがの燦さん、金磚きんせんの

麗、目も綾あやなすばかりである。豪奢雄大、この世に譬たとえるものもない。

——が、たちまち一面に、民力の疲弊ひへいという暗い喘あえぎが社会の隅から夕闇のように漂ただよい出した。巷えんさの怨嗟。これはもちろん伴ってくる。

この上にも曹叅は、

「芳林閣ほうりんかくの改修をせよ」と、吏りを督して、民間から巨材を徴発し、石や瓦や土を引く牛のために、民の力と汗を無限に濫用した。「武祖曹操様すら、こんな贅ぜい沢たくと乱暴はなさいませんでした」と、諫いさめた公卿くげもある。もちろん曹叅そうえいには肯きかれない。のみならず斬首された者もあつた。

反対に、こういう甘言を呈する者もある。

「人は、日精月華につせいげつかの氣を服せば、つねに若く、そして長命を保

ちます。——いま長安宮中に柏梁台はくりやうだいを建て、銅人を据えて、

手に承露盤しょうろばんを捧げさせるとします。すると盤には毎夜三更の頃、

北斗から降る露が自然に溜たまります。これを天漿てんしょうとよび、また

天甘露てんかんろと称となえています。もしそれ、その冷露に美玉の屑しょうまつ末

を混じて、朝な朝なご服用あらんか、陛下の寿齡じゅれいは百載さいを加え、

御艶おんつやもいよいよ若やいでまいるにちがいありません」

こういう言を飲よろこぶようになっては、曹叅の前途も知るべしであ

る。

が、魏の国運は、なお旺さかんだった。これはおそらく良臣や智識が

多かつたに依るであらうが、曹操以来の魏は、何といつても、士馬精銳であり、富強であつた。

中でも、しばいちゆうたつ司馬懿仲達は、魏にとつては、まず当代随一の元勳だつた。自然、彼の一門は、隆々、勢威を張るにいたつた。

延 十四年、魏の嘉平三年。その仲達は歿して、国葬の大礼をもつて厚く祭られ、いしよくくんしやく遺職勲爵は、そのまま息子の司馬師が継いだ。

ところが、この師も、間もなく逝去した。弟、しやう昭が跡目をついだ。

昭は一時、大いに威を振るい、大魏大將軍になり、また、しん晋王きゆうしやくの九錫きゆうしやくをうくるにいたつて、ほとんど、帝位に迫るの勢威を

示した。

この昭が終ると、その子の、司馬炎しばえんが王爵をついで立つた。魏の朝廷は、このときすでに元帝の代に入っていたが、炎は、この元帝を退位させて、自ら皇帝となり、新国家の創立を宣した。

これが、晋しんの武帝である。

かくて、魏は、曹操以来五世、四十六年目で亡んだことになる。

——それはまた実に、蜀の滅亡後、わずかに三年目のことだった。魏蜀を併合して、晋しん一体となったこの国が、なお呉を余していたのは、呉に間隙がなかったによる。とき呉の孫権もすでに世を去り、次代の孫皓そんこうの悪政が、南方各地の暴動を醸かもすにいたるまでは、長江の嶮けんと、江東海南の地を占めるこの国の富強と、建業

城中の善謀忠武の群臣は、なお多々健在であつたといえる。

しかし、敗るるや、急激だつた。四世五十二年にわたる呉の国業も、孫皓そんこうが半生の暴政によつて一朝に滅んだ。——陸路くがじを船路を、北から南へ北から南へと駸々しんしんと犯し来れるもののすべてそれは新しき国の名を持つ晋しんの旗であつた。

三国は、晋しん一国となつた。

青空文庫情報

底本：「三国志（八）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年5月11日第1刷発行

2008（平成20）年7月1日第49刷発行

※副題には底本では、「篇外余録《へんがいよろく》」とルビがついています

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2013年7月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三国志

篇外余録

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>